

Prof. A. Hillの 細胞生物学的日常

Episode 6

月 日、巷がドイツ、ドイツと騒がしいので（研究に没頭していて世間の動向を全く知らない人のための注：ドイツでサッカーのワールドカップが開催されている），自分がドイツ・ハイデルベルクに留学していた頃を思い出す。もう10年以上前だ。当時、実験医学のラボレポートというコーナー（本誌の海外便りのようなもの。って、こっちが真似だが）に綴った留学体験記みたいなものを引っぱり出してきて読み返すと、結構まじめなので驚いた（平均よりは間違いなくふざけているが、自社比較ってやつです）。10年で人間は堕落する。所属していたEMBLという研究所や、ボスのKai Simons（現在はドレスデンのマックスプランクの所長。詳しくはメントラNL4号の小曾戸さんの海外便り参照）などについて、なかなか鋭い観察を行っていて我ながら感心してしまった。10年経つと人間はアホになるなあ。では、心を入れ替えてこのエッセイもまじめで役に立つものにすべし、と思ったのだが、いかんせん身体がいうことをきかない。もう自分でも止められない。（10年で人間は開き直る。）



さて、だからここでは研究とは関係ない留学の思い出を語ろう。そもそも、私がドイツに留学しようと思ったのは色鉛筆を買いたいという不純な理由であった（とうとうカミングアウトしてしまった）。私は何を隠そう色鉛筆好きで（威張るようなことじゃないか…），特にドイツに本拠を置くファーバーキャスティル社のポリクロモス（色鉛筆の名前）をこよなく愛している。発色といい、描いたときの滑らかさといい、世界最高だ。そし



これが問題のヅツ。おかげさまでドイツにて特売品を見つけ格安で購入。留学の目的は達成された。色鉛筆で描いた絵は、玄人はだしの五嶋先生の絵と同じ号じや恥ずかしいので出さない。

て、その100色セット木箱入り、というのが欲しくて欲しくて仕方なかった。大人だからもうサンタは来ないし、色鉛筆に3万円（高いんだよなあ）も出すのは家計が許さないし、と鬱々としていた頃、天啓のごとく、そうだ、ドイツに行けば安く買えるかもしれない、という1905年のAINシュタインも斯くやの名案が浮かんだ。そして、奈良を案内したことで知り合ったKaiがドイツに居るってんで渡りに船と留学を決めた。



EMBLの裏の牧場。タンポポの野原に佇む純真な幼子が、10年でこんなこと（右図）になるとは誰が予想したであろう。げに恐ろしさは環境要因なり。（本人の名誉のために言うと、これは体育祭用のフェノタイプで普段はもっとまとも。かな…）

行ってみたら、ドイツ（というよりもハイデルベルク）はすこぶる居心地の良いところだった。たぶん、おっとりしたドイツ南部の（北部人からは馬鹿にされている）、それも古い中くらいの都市というのが性に合っていたのである。まず自然が豊か。街はずれの丘の上にあるEMBLの周りも素晴らしい森で、実験医学の自分の文章を借りるなら「信じられないほど爽やかな5月の晴れた日に身体の内まで染み通りそうな新緑のなかを歩けば」誠に心が洗われるというのはこのことか、という気持ちの良さであった。冬が暗く長いので（日の出が8時で、4時過ぎに日没。どんより曇った空。ラボのイタリア人が、こんなの人間の住むところじゃない、もう国に帰る！と絶叫していた），一斉に花が咲き、緑に溢れる春の嬉しさは格別だ。毎週末、家族でピクニックに行っていた。遠くまで行かずとも、そこかしこにピクニックにうってつけの場所があり、広大な芝生の公園があり、それに乾燥した空気のせいかやたらとビールがうまい（各都市ごとに何種類も地ビールがあり、それぞれすんごい気合いを入れて作っていることも美味の原因。しかもミネラルウォーターより安い！なおドイツ人はソーセージとビールに全精力を使ってしまっており、後のものは美味しい）。

ハイデルベルクのダウンタウンをぶらぶらするのも楽しかった。観光地なので（日本人多し。みすぼらしい格好をしているせいか、私は同胞と思って貰えず英語で道を聞かれたことがある）、ハウプトシュトラーセ（中央の通りの意。そのまんまや）には人が多いが裏通りに入れば落ち着いていて実によろしい。ハイデルベルクに限らず、ヨーロッパの古い街の裏通りは



家が飛んでいたり、不思議な絵だ。版画屋のおっちゃん自身の作品か。大きい作品もあるが、こういう豆版画が特にいい。とても小さいのでスケールバーを入れた（もちろん、ほんまは1cmでっせ）。

人を惹き付ける。通常の時空を逸脱したような、ちょっとひやりした居心地の良さ。大都市では危険もあるかもしれないが、ハイデルベルクくらいだと全く安全だし。そして、角を曲がると不思議な版画を売る小さな店がひっそりアリたりする。そこで、極小版画を物色したあとは、もう少し歩いていつものカフェで、ケーキとコーヒーを。そうそう、ドイツはビールとソーセージだけだとけなしたが、コーヒーもうまい。しっかり濃くて深い味わい。（ところで、アメリカのあのコーヒーのまろさはいったいなんなのか。ここはアメリカだと言うことを想い出させるため？）ケーキは不細工だが、これまたしっかり甘くてうまい。帰国後日本のケーキがぼやけた味に思えたものだ。確か、クネーゼルって店。今でもあるだろうか。誰か見つけたら、バームクーヘンを食べてみて欲しい。他にも、イタリア人のやっている小さな総菜屋や、どれだけあるか分からない位のたくさんのワインの谷間にひっそり座っている親爺の居る店、ここではドイツワインではなくイタリアや南フランスのワインばかり買っていたが、こっちの好みをよく憶えていて行きたびに違うワインを選んでくれた。帰国するときには、5年間飲むなよとボルドーのいいのをプレゼントしてくれた。ああ、いつかまたヨーロッパ



これも同じ版画屋で買った。ハイデルベルク名物のアルテブリュッケ（古い橋。また、まんまや）。普通の題材でも味がある。



ハイデルベルクから車で1時間のストラスブル（フランス）の裏通り。よく訪れた。タルトタタンのうまいビストロがあった。島国人としては、車で外国に行けちゃうということに感動してしまう。

で暮らし、裏通りをそぞろ歩きたい。

EMBLは、ヨーロッパ諸国が金を出し合って維持している研究所なので様々な国から人が集まっている。私はここで生まれて初めてルクセンブルク人やラトビア人に会った（ラトビア人は、ドイツの冬は暖かいと感心していた。車のドアが凍るのに…かの国ではマイナス何十度とかになるらしい）。アメリカも世界中から人が集まるが、みなアメリカナイズされてしまう感じがするのに対し、ここでは見事にお国柄丸出しで（我々から見ると同じ顔してんのに）これが大変面白い。フィンランド人はジョーク好きでお互いに大笑いしているがこれがまた全然面白くない（当初英語が分からず一緒に笑えないので悔しい思いをしていたが、分かるようになっても笑えなかったので愕然とした）。スペイン人は、異常に群れるのが好き。でもバルセロナの人間はマドリードを同じ国だと思っていない。イタリア人の場合、友達の友達は当然友達。私達が帰国に際して開いたパーティーには、知らないイタリア人がたくさん来て初対面なのに抱きついて泣かんばかりに別れを惜しんでくれた。同じラボに仲良しのイタリア人がいたからだ。ギリシャ人は情に厚い。阪神大震災の時、知らないギリシャ人が慰めに来てくれた（地震のある国だから人ごとに思えなかったのだろう。ドイツは天災がほとんどない。あるドイツ人に何でそんな物騒な場所に住んでいるんだと言われ腹が立ったが、そんな感覚なのだろう）。イギリス人は孤高。何かと私を助けてくれたケンブリッジから来たやつは、考えてみたら私よりずっと若いのだが妙に老成・達観していて、「日本にもいい点はある。左側通行。」みたいなことを言って、やりとする（もちろん英国は左側通行）。なかなか捻りの効いた渋いジョークを言うのだが、フィンランド人には理解されない。私が実験で頭にきたりしていると、自國から送ってもらっているミントの粒をくれて「東の若い国（イギリスより古くないか？）から来た人よ、落ち着きなさい」とのたまう。沈着冷静な彼が一度だけしくじったことがあって、私がミュンヘ

ンのドイツ博物館が素晴らしかったと皆に話していたら、彼は思わず大英博物館に比べたら子供だましたと言ってしまい、ドイツ人に、植民地から奪った物で作った癖に、と猛反撃されていた。この手のことは時々あって、私が昨日飲んだイタリアワインが美味しかったというと、イタリア人はもう鼻の穴ふくらませてそうだろうそうだろう、ドイツ人は渋面を作つてドイツワインの優秀さについて演説を始め、スペイン人も負けていないし、最後にはフランス人に私は部屋の隅に連れていかれて「（人差し指を顔の前で振りながら）チッチッチ。フランスワイン以外はワインではなあーい。」 欧州人達つていいでしょ。

たった2年間しかいなかつたが、実に濃密な期間であった。書きたいエピソードはまだまだあるので、そのうち続編をやるかもしれない。ねつ造事件に巻き込まれたりして苦労もしたが（留学中に前髪の一部がごっそり白くなった。メッシュを入れていると勘違いされるが、こんな私でも心労はあるねんで），それを遙かに上回るfunがあった。友ができた。彼我の違いを知った。最近は日本の研究レベルのほうが高くて留学のメリットも減つているし、若者も無鉄砲をしない傾向が強いし、状況が変わつつあることは承知しているが、それでも私は留学を勧める。海外で暮らし各々が経験することは千差万別であろうが、きっと何かが得られると思うから。



哀愁のヨーロッパ。と書いて、サンタナを想い出した。マックス・エルンストの絵のタイトルにもあったような気が…

*付記：色鉛筆の話、初めて書いたつもりだったが、細胞生物学会の機関誌「細胞生物」の巻頭言に大昔に既に書いていた。カミングアウトしまくりやん。それにしても、私のハチャメチャ巻頭言が学会の公式サイトに出てるのはまずくないですかね、学会として。堅い学会なのに。